

# 史料紹介 『看聞日記』 現代語訳（九）

An Introduction of Historical Material: Modern  
Language Translation of *Kanmon - Nikki* (No.9)

蘭 部 寿 樹

Toshiki Sonobe

山形県立米沢女子短期大学

『生活文化研究所報告』

第44号 抜刷

2017年 3 月

史料紹介

# 『看聞日記』現代語訳（九）

蘭 部 寿 樹

本稿は、室町時代の皇族・伏見宮貞成（二三七一～一四五六）の日記『看聞日記』を現代語訳したものである。本稿の底本は、小森正明氏代表校訂『図書寮叢刊 看聞日記』一（明治書院、二〇〇二年）である。難しい語などには※の印を付け、その条の末尾に註を付けた。また、日記原文には改行がないが、訳文は内容に応じて適宜改行した。なお、敬語についてはやや不自然な表現があるが、当時の伏見宮貞成の微妙な立場を勘案した結果である。

- 現代語訳（一）～（三） 応永二三年（一四一六）分 『米沢史学』三〇号・『山形県立米沢女子短期大学紀要』五〇号・『山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』四二号（二〇一四～一五年）
- 現代語訳（四）～（六） 応永二四年（一四一七）分 『米沢史学』三一号・『紀要』五一号・『生活文化研究所報告』四三号（二〇一五～一六年）

- 現代語訳（七） 応永二五年一月一日から四月三〇日まで。『米沢史学』三二号、二〇一六年

- 現代語訳（八） 応永二五年五月一日から八月二九日まで。『紀要』五二号、二〇一六年
- 本稿で訳出したのは、紙幅の都合上、応永二五年九月一日から応永二五年十二月二九日までの分である。『看聞日記』を現代語訳した経緯

緯などについては、（一）を参照されたい。

本稿により、『看聞日記』の面白さを少しでも多くの方に知っていただき、さらに原文に当たってもらうことができれば、本望、これにすぎるものはない。皆様からのご示教・ご叱正を切に望む。

## 【主要参考文献】

- 横井清『室町時代の一皇族の生涯』（講談社学術文庫、二〇〇二年、初出一九九九年）
- 位藤邦生『伏見宮貞成の文学』（清文堂、一九九一年）
- 小森正明代表校訂『図書寮叢刊 看聞日記』一～七（明治書院、二〇〇二～二〇一四年）
- 村井章介『綾小路信俊の亡霊をみた―『看聞日記』人名表記方寸考―』（同『中世史料との対話』、吉川弘文館、二〇一四年、初出二〇〇三～二〇一四年）
- 松岡心平編『看聞日記と中世文化』（森話社、二〇〇九年）
- 松蘭斎『『看聞日記』に見える尼と尼寺』（愛知学院大学人間文化研究所紀要『人間文化』二七号、二〇一二年）
- 同『室町時代の女房について―伏見宮家を中心に―』（愛知学院大学人間文化研究所紀要『人間文化』二八号、二〇一三年）
- 堀畑正臣『『看聞日記』に於ける「生涯」を含む熟語の意味―「及生

涯」「懸生涯」「失生涯」「生涯谷」等の意味について―」（熊本大学『国語国文学研究』四七号、二〇一二年）

田代博志「山城国伏見荘における沙汰人層の存在形態と役割」（『中近世の領主支配と民間社会』、熊本出版文化会館、二〇一四年）

（応永二十五年）九月一日、晴。「良い兆しだ。すべてのことがとても幸せだ」と予祝した。定例の御香宮の祭礼があった。相撲をお忍びで見物した。重有・長資朝臣らも連れていった。

#### 妙法院宮堯仁親王への揮毫依頼

二日、晴。鵝障子を飾る色紙に書く漢詩を妙法院宮堯仁親王にお願いした。これまで連絡をとったことがなかったので、日厳院を通して申し入れた。唐紙の色紙二枚と漢詩二編を送った。これとは別に天神の名号を揮毫してもらうこともお願いした。これは重有朝臣が希望したことである。いずれも執筆することに問題ありませんというお返事だった。豊原郷秋が来たので、音楽会をした。平調の曲七つを演奏した。長資朝臣も参加した。

#### 新内侍懷妊事件の讒言者は中御門宗量

さて中御門宗量中納言は、後小松上皇様のお怒りに触れて、謹慎中である。室町殿が上皇御所へ行かれた折に、中御門のことをさらにいろいろと悪く話されたので、上皇様は「この先、中御門は絶対に許さない。中御門のことに關して、今後一切取り次がないように」と仰ったそうだ。

中御門の不義の一つは、新内侍懷妊事件に關して、無実である伏見宮家について中御門がすべて讒言を行ったことだそう。伏見宮

家の無実をお知りになって、上皇様は中御門を御所から追放なさったという。世間の人々もそのように噂しているのを聞いた。すべて神の思召しによるものであり、とてもうれしい。またもう一つの不義は、中御門が国母である二位殿日野西資子殿と密通したことだという。あれやこれやで重罪に処されたものといえよう。

三日、晴。妙法院宮殿が自筆で漢詩を書いた色紙をお送りくださった。すばらしい筆遣いである。天神の名号「南無天満大自在天神」も同じく書いてくださった。昨日お願いしたばかりのことなので、なおさらにとっても嬉しい。

六日、晴。称光天皇陛下は急に喉がしびれる症状となり、ご容態はよくないという。皆、驚いた。しかし、しばらくして持ち直したそうだ。

#### 侍所司代の使者

八日、晴。御香宮の御旅所にお参りした。さて侍所の長官補佐が二人の使者を寄こした。使者によると、盗犯の三木善理や親類を伏見荘に帰住させることや、没収した三木一族の田畠などをすべて返すことなどを、將軍が上意として命令なさったという。また使者は、ともかくも今すぐ屋敷地や田畠を三木一族にお渡し下さいと申し添えた。よく考えず、すぐにこの命令に應じるのはよくないことだと、宮家の皆々が話し合った。そこで、「こちらから改めて室町殿へお話ししまして、ご命令に従うようお返事します」と返答しておいた。そうしたら二人の使者は帰っていった。背後に三木の主人である畠山満家の意向が働いているなどの内情はうすうす想像していたが、突然の使者に驚いた。今となっては、三木一族を帰住させるしかな

いであろうか。

九日、晴。夕方に小雨が降った。「重陽の節供で、良い日和である。とても幸せだ」と予祝した。いつものように御節供のお祝いをした。その後、御香宮祭礼見物のため、田向家に行った。宮家の女性達も皆一緒にいつてきた。惣得庵主以下四く五人、それに寿藏主・瑛侍者・周郷ら田向家の関係者も大勢詰めかけていた。まず一献の酒宴をしていたら、小雨が降ってきた。そのため、先にお囃子の行列が来た。雨があがつてからは、いつものようにお神輿がやって来た。

#### 御香宮神主三木善国の祭礼不動仕

今年のお祭りの幹事役は内本善祐であった。祭式はすべて先例通りだ。しかしお神輿に神主がお供していない。三木善理の伏見莊歸住の訴えがいまだ認められないので、神主である善理の息子善国は、他郷にいる三木善理に呼び出されて不在なのだという。不可解なことだ。田向家では一献を丁寧な振舞ってくれた。三献終わったところで、宮家に帰った。

琵琶と和歌を百日間練習するのは、例年通りである。そこで、私の和歌をみてもらうため、今出川家に和歌の短冊を送った。私が今出川家で暮らしていた時から今に至るまで、ずっと変わらず、こうして和歌を詠んできたのだ。

#### 近江猿楽の敏満寺座

十日、晴れたり曇ったり、お天気が一定しない。獅子舞が来た。いつものようにご褒美を与えた。法安寺の猿楽をいつも見物しているのだが、今年は法安寺に差し障りがあるとのこと、見物できなくなった。残念だ。宮家の男共は見物に出かけた。近江国猿楽の敏満寺

座だそう。御香宮の猿楽も、同じく敏満寺座である。

#### 侍所の両使

十一日、晴。三木善理のことで、田向三位が京都に行った。その途中の道で、伏見に向かっていた侍所の使者二人に出くわしたそう。使者が詳細に事情を説明したので、田向三位は途中で伏見に戻ってきた。

その使者が言うには、「三木善理や同善康の名田や屋敷をお返し下さい」という内容の、富樫満成兵部大輔が執筆した室町殿の命令書が、侍所の長官である一色に出されたという。盗犯の三木三郎に対する当方の処罰については、何もご介入はなかった。「ただ三木善理自身は盗犯の本人ではなく、犯人の一族として連座した軽いご処罰に過ぎないものでしょう。したがって、もうそろそろ今となつては、お許しになつてもよろしいのではないでしょうか」というのが室町殿の仰せらしい。

この室町殿の提案を即座に了承するのは軽々しい。そこで、なお実情を説明するため、私の書状を持たせて田向三位を京都に向かわせた。「室町殿の仰せですから、三木善理が帰住することはかまいません。ただ彼者の不義不忠は一つではありませんので、今後のために三木善理に誓約書を書くようお命じ下されば、うれしく存じます」とその書状に書いた。この件に関してこれまで直接室町殿へ連絡をとったことはなかったが、急ぎのことなので、田向三位には直接書状をご覧に入れるよう命じた。世尊寺行豊朝臣も田向と一緒に行ってくれた。侍所の二人の使者も同行したそう。

今夜は山田宮や権現社などで神事猿楽の奉納があった。



## 侍所司代の見解

十二日、雨が降った。田向三位が帰ってきた。「室町殿へ直接お話しすることについていろいろと考えてみました。やはり室町殿ご自身のお考えが推測できないので、まず侍所へ行きました。侍所では長官補佐と面会して、いろいろ話し合いました。『三木の主人である畠山満家殿が言っていることに、道理がないわけではない。だから將軍様のご命令として善処しようとしたのだ。去年から畠山殿が申し入れていることを今までお許しにならなかったのは、伏見宮家の特段のお気持ちがあつてのことでしょう。でもあまり頑なに拒否なさってばかりというのも、よろしくないのではありませんか』、長官補佐はそうように力説していました」と田向三位は報告した。

その後、田向三位は清原常宗と相談したところ、この件に関して、常宗はこれまで何も関与していないので、今回、この書状を取り次ぐことはできないと断られたそうだ。「やはり本筋に戻って、富樫に取り次いでもらうべきでしょう」と常宗から助言されたので、富樫の所へ行つて詳しく話をしたという。富樫は「ご書状を取り次ぐことはできません。ただ伏見宮様が仰ることを、室町殿のご機嫌がいいときにお話ししてみしよう」と言ってくれたそうだ。それで仕方なく書状を持ち帰ってきましたと田向は報告した。残念だが、今となっては仕方のないことだろう。

## 畠山満家の怒り

十三日、晴。朝早く世尊寺行豊朝臣の使者が来た。「昨夜、侍所長官補佐の使者である木山が世尊寺家に来ました。木山によると、三木善理の誓約書の件を畠山満家殿にお話ししたところ、畠山殿はとて

もお怒りのご様子だったようです。『將軍様の上意として命じたことを、二度までもないがしろにしたのはおかしい。長官補佐が何もしないのは、伏見宮様に丸め込まれているためだろう。この期に及んでは、わし自身が伏見に出向いて、是が非でも三木善理の件を片付けてやる』と畠山殿は息巻いていたようです。侍所長官補佐の使者である木山は、以上のように世尊寺行豊に伝えてきました。世尊寺の使者はこのように伝えてきた。

そこで田向三位をまた京都へ派遣した。田向は夕方に戻ってきた。「富樫の屋敷や侍所などに行つていろいろと話をしてきました。事柄は多岐に渡りますが、今となつてはどうしようもないようです。今日明日にも、三木善理らの名田を返すことに、こちらから反論できる状況ではありませんでした」とのことだった。仕方ないことだろう。

今夜は名月なので、和歌の題をだしたが、忙しくて和歌の短冊を集めるどころではなかった。残念である。型通り、いつものようにお月見をした。惣得庵主が来て、数時間、雑談をした。宮家の女性達は行蔵庵に行き、賑やかに過ごしたらしい。

## 足利義持の命令

十四日、晴。風呂に入った。さて広橋兼宣から書状が来た。室町殿からお伝えしたい事があるそうですので、御使者を派遣して下さいとのことだった。また田向三位に行かせるのはかわいそうなので、世尊寺行豊朝臣を派遣してお伺いさせますと返事をした。

夜になって世尊寺行豊朝臣から返事が来た。広橋の所に行き内容を尋ねたところ、「今朝、室町殿が仰せになったことには、『三木一

族のことを伏見宮様にお話ししたはずだが、まだ伏見に戻っていないそうだな。その後、伏見宮様からは三木に誓約書を出させるといようなお返事があつたらしいが、わしの所にはつきりとした連絡がなく、どうなっているのか、よく分からない。伏見宮様に事情をお尋ねしなさい』とのご命令でした」と、広橋は世尊寺に言ったそう。

それで私は広橋に書状を書いた。「三木両人が伏見に戻ることは問題ないと、先日連絡したとおりです。そのことに關して、彼らの不義不忠は一つに止まらないので、今後は不義を働かないことを誓約書に書かせて提出させてほしいと侍所に依頼してあります。この事について、室町殿のお考えとして問題はないかどうか、お確かめ下さい」と書状に書いて広橋に送った。三木に誓約書を提出させることについて、室町殿が同意して下さることを心より願っている。十五日、晴。明け方に田向三位が私の書状を持って広橋の所に行った。そして午後四時頃に戻ってきた。広橋は既に室町殿の御所へ出かけていたので、田向もその足で直ぐに御所へ行ったそう。御所で広橋と面会して、詳しく説明をしたという。

### 三木善理・義康の伏見荘帰住

広橋卿が言うことには、「三木の帰住に問題ないということは、先日、既に室町殿へご報告しております。誓約書を提出させる件については、今すぐ申し上げるのはやや支障がありますので、後で室町殿にお話ししてみます」とのことだった。以上のように広橋へ宮様のご意向をお伝えしたので、そのまま帰って参りましたと田向は報告した。

夕方になって、侍所の二人の使者、大野某と三方七郎右衛門が来た。三木助太郎善理と与一義康の名田や屋敷などをお渡し願いたいと申し入れてきた。そこで、すぐにその様に命令して、命令書も出してやった。二人の使者はその命令書を見た。すぐに伏見荘の役人たちが、二人に名田などを渡した。すると、すぐさま善理と義康がお礼を言いにやって来た。室町殿のお手を煩わせて、このように二人を許すことが出来たのは、まずはありがたい事だ。室町殿は、今夜から法会をお始めになったという。導師は、青蓮院主だそう。

### 播磨国飾磨津別符の代官職

十七日、晴。梅尾の経増が播磨国飾磨津別符の代官職を勤めたいと申し込んできた。課役として三貫文を貢納致しますと言って、すぐに誓約書を送ってきた。「課役の額が少ないので、もっと増やしなさい」と命じて、誓約書を送り返した。経増は誓約書とともに、お茶三十袋と生姜なども献上してきた。

宮家の女性達や庭田重有・田向長資ら朝臣らは行藏庵に出かけた。先日（十三日のことか）のお礼をしに行ったそう。惣得庵主が来て、数時間雑談していった。

### 栗の博奕

十九日、小雨が降った。栗の博奕をした（※）。

※「栗の博奕」…どのような博奕なのか、未詳。

二十日、晴。夜に雨が降った。いつものように身を淨めた。行藏庵壽藏主が一献のお酒を持って来た。そのお酒を飲んで、身を淨める勤行を終了することにした。

二十一日、雨が降った。室町殿は今日、伊勢神宮に参拝しに行ったそ

うだ。お供の公卿は、北畠俊康大納言・日野有光中納言・万里小路時房参議兼左大弁、殿上人は高倉永藤朝臣・中山定親朝臣・勧修寺経興だそうだ。

二十二日、晴れたり曇ったりと、天気ははっきりしない。蔵光庵主が松茸を献上してきた。寿蔵主は明後日、長谷寺へお参りに行くそう。白川資忠王二位神祇伯も同行するらしい。餞として、寿蔵主に酒を振る舞った。聞くところによると昨日の室町殿の伊勢参宮は、雨で延期になっていたそう。今日、伊勢国にお出かけになるらしい。

#### 伏見荘延光名主職

二十四日、野遊びに出かけた。田向三位らも一緒である。帰り道に即成院に寄って、酒を飲んだ。

さて正親町三条公雅大納言が取り次いでいる延光名の名主職のことだが、正親町三条家の侍である教基がその名主職を望んでいるようだ。今日、教基の代わりに教基の兄と名乗る者がやって来た。田向三位に詳しい事情を尋ねさせるところ、上皇様の命令書の写しを持って来ていた。それを見たら、なんと係争中の相手方である善住方(※)に出された命令書なのである。教基はこの延光名主職を争っている相手宛てに出された命令書を、なんと自らの証拠として持ち出してきたのだ。言葉にできないほど、理解不能な行為である。この不道理を事細かに話して聞かせたら、教基の兄と名乗る者は押し黙ったまま、出ていった。正親町三条がこんな者を取り次いでくなんて、愚かしいにもほどがある。

※善住方：南禅寺善住庵か。永享五年正月二十一日条裏書参照。

二十五日、晴。毎月恒例の連歌会を延期した。ただ臨時に懷紙一折りの五十韻だけ詠んだ。いつものように風呂に入った。

二十六日、晴。昨日の参加者で残りの五十韻を詠み、百韻読み終えた(※)。

※「百韻読み終えた」：原文は「百韻に賽(むく)いおわりぬ」。

二十七日、晴。今日は禧準蔵主の七回忌なので、東福寺の塔頭で偶蔵主が仏事を執り行うそう。それで、形だけの些少のお布施を送った。

寿蔵主が長谷寺から戻ってきた。一緒にお参りに行ったのは、白川資忠王二位神祇伯・清水谷実秋卿・白川資雅朝臣・和氣郷成朝臣だそう。小川禅啓以下の者たちが宇治まで出かけて坂迎え(※)の用意をしたという。

室町殿が伊勢国からお戻りになったそう。

※坂迎え(さかむかえ)：遠い旅から戻る者を村境などで出迎えて、酒宴をすること。

二十九日、雨が降った。聞くところによると、称光天皇陛下がご病氣だそう。病氣治療のために法会を行わせたという。

十月一日、「初冬の節目を迎え、すべてのことが幸せだ」と予祝した。いつものように月初めのお祝いをした。

二日、智恩院隆秀僧正が一献のお酒をもって来た。すぐに対面した。私ははじめてお目にかかった。陽明局・田向三位・庭田重有・田向長資・世尊寺行豊ら朝臣たちも同席した。五献の酒宴の後、隆秀僧正は帰った。

蹴鞠は不得手

その後、蹴鞠をした。世尊寺行豊朝臣がやりましようと言い出したのだ。私は不得手である。その上、この七、八年は全く蹴鞠をしていないので、なおさら下手になっている。しかし、人数に加わった。田向三位らも蹴鞠をした。

さて称光天皇陛下のご病氣は一昨日既に重態であったが、少し持ち直されたらしい。お風邪だと医師は言っているそうだ。昨夜より、薬師の修法を聖護院がなさっている。

### 称光天皇、化け物と会う

さきごろ、内裏に化け物が出たという。腰から下の身体は消えていて目に見えない、女房姿の化け物だそうだ。称光天皇陛下が大便所で目撃なさった。その時からご病氣になったという。この化け物のことを、天皇陛下は白川資雅朝臣にお話したそうだ。だから単なるうわさ話ではない。

三日、晴。洪蔭藏主がいらっしゃった。今年になって初めてのご来臨だ。こんなに疎遠となっていたのは、思いがけないことで、残念であった。少しお酒を飲んだ。その後、洪蔭藏主と共に指月庵へ行った。田向三位たちも同行した。指月庵で和漢連句をした。そして秘かにお酒も飲んだ。夜になって懷紙一折り分終わったので、宮家に戻った。

さて、北野天満宮へ立願成就お礼の和歌百首を奉納しよう企画した。それで皆から和歌を募るために、世尊寺行豊朝臣に和歌の題を書かせた。上・下に雲の形を漉きだした鳥の子紙で短冊を百首分作って、皆に配付した。この立願は、新内侍懷妊の汚名を雪ぐことにあった。無事にこの願いがかなったので、そのお礼に和歌を奉納

するのである。

播磨国飾磨津別符・山城国武蔵堀池・備中国大島保の所職を任命する四日、晴。洪蔭藏主・庭田重有朝臣等とともに、蔵光庵に行った。紅葉を見てきたが、まだ盛りではなかったもので、すぐに帰ってきた。

さて梶尾の僧（※）である経増が播磨国飾磨津別符の代官職を頻りに望むので、任命書を与えた。この任命書は庭田重有朝臣に書かせた。課役は五貫文ということに決まった。

また山城国武蔵堀池については、私の代になってまだ代官を決めていない。永円寺住職が頻りに言ってくるので、永円寺住職に任命書を与えた。

さて備中国大島保の管理については、町経時治部卿に任命書を与えた。田向長資朝臣がその任命書を書いた。任命書の書き止めは「執啓、件の如し」とした。公卿が治部卿を兼任している場合は、このような書き止めになっているからである。

### 八省の長官に対する書札礼

この書き止めの文言について疑問があったので、今出川公行左大臣に聞いてみた。四位の殿上人で八省の長官を勤める者や単なる四位の殿上人に対する書状の礼儀としては、いずれも同じく「執達、件の如し」で十分だという。今回、町に対して「執啓」と書いたのは丁寧すぎますと、今出川左大臣は申された。『弘安書札礼』にも八省の長官に対する礼儀についての記載はない。だから、八省の長官に対する特別な厚礼は不要であろう。ということで、今回の任命書で「執啓、件の如し」と書いたのは、誤りのようだ。書札礼については、今後もよくよく調べてみなければならない。

※「梅尾の僧」：原文では「山坊」とあるが、応永二十五年六月十七日・同年九月十七日条によると、経増は梅尾の僧。

五日、晴。洪蔭藏主がお寺にお帰りになった。称光天皇陛下のご病氣平癒のため、神社七社にご供物を奉納なさった。その奉納責任者は西園寺実永右大將だそう。陛下のご病狀が少し良くなったそうなので、後小松上皇様へ、いつものように冷泉永基を通して、お祝いを申し入れた。

#### 丹後国田村荘

さて丹後国田村荘は、高辻長衡卿以来、現在の高辻長弘朝臣に至るまで、高辻家に代々管理させてきた。この田村荘の租税は、永陽門女院が浄金剛院の不断念仏の費用に寄進なさったものである。ところが近ごろは田村荘から租税が出されないの、この念仏の法会が途絶えてしまったそう。

この荘園はもと室町女院領なので、田村荘の管理運営を浄金剛院に任せるように命令書を出して下さいと、寺主である椎野殿が願ひ出てきた。すぐにそのような命令書を出すのはいかがなものだろうかためらっていた。しかし、椎野寺主が強く申し出てきたので、命令書を出した。長広朝臣は近年、伏見宮家へお勤めをしていないので、反対意見を言うてくことはなからう。

夜になって豊原郷秋が来たので、双調の曲を九つ演奏した。田向長資朝臣が大鼓を打った。

六日、晴。朝早く豊原郷秋が来たので、黄鐘調の曲を九つ演奏した。

田向長資朝臣が大鼓を打った。

七日、晴。三福寺から使者が来た。この七月に前の住職が亡くなって

いる。前住職の後継ぎがまだ幼いので、住職が代替りしたことを報告する使者を寺僧たちが寄こしたそう。後継ぎは、大館の末子で十一歳の小僧だという。

八日、雨が降った。勝阿の病狀が重態だと聞いた。お見舞いの使者として行光を派遣したところ、勝阿は中風で、また脚氣も併発しているという。年老いてからの病氣なので、この先どうなるかは心許ない。かわいそうなことである。

九日、晴。田向家の庭に、蹴鞠用の木を植えた。さて今出川公行左大臣は七日に蚊に刺されたために、喉の左下が腫れているという。食事もなく喉を通らないと聞いて、驚いている。

十一日、晴。正親町三条公雅大納言が梅の木を下さいと言ってきた。

それで、前庭の小さな梅の木を一本送った。その代わり、法安寺の梅の木をもらって、前庭に植えた。

#### 松茸狩り

田向三位らを連れて、遊山に出かけた。月見岡の南麓で松茸を五〇六本見つけ出して採った。この場所には以前、松茸は生えていなかったのだが、偶然に見つけたので、とても愉快だった。帰ってから、すぐに松茸を食べた。行藏庵寿藏主がお酒を一樽持つて来た。

長谷寺参詣のお土産だという。

十二日、晴。後小松上皇様から直々に、先日のお返事があった。詳しいことがいろいろと書かれてあった。そして今後は、上皇様ご本人宛の形式で書状を寄こしてよろしいとのこと命令があった。恐れ多いことで、うれしかった。

十三日、晴。即成院の梅の木を一本、善基が献上してきたので、庭に



植えた。またその代わりに、庭の梅の木を一本、即成院へ送った。

## 勝阿の死

十四日、勝阿が今日、亡くなったそう。伏見宮家への奉仕は他と異なり格段であつたので、残念きわまりなく、悲しみは少なくない。

勝阿の遺産を祐譽律師が継ぐのは、当然のことである。

## 備中国園荘

十六日、雨が降った。「備中国園荘の支配について、備中国守護関係者に知り合いますので、何とかなるかもしれません」と椎野寺主が連絡してきた。そしてすぐに守護の家人である富田中務丞という者がやって来た。富田は「守護の細川頼重兵部大輔に宛てて、守護請の任命書をお出し下さい」と言う。そこで田向三位が文案を考えて、とりあえず任命書を書き与えた。「まず何よりも現地をしつかりと掌握します。こうして本来の領主様が応援して下さいからには、しっかりと支配を進めます」と富田は返答した。園西荘は理覚院が現在支配している。園東荘は、梅津長福寺が支配を受け継いでいるようだ。現在の支配がどうなっているのかはよく分からない。

## 源氏物語書写の背景

十八日、晴。今出川公行左大臣から書状が来た。それによると、この前、水無瀬具隆が私に書写を依頼してきた源氏物語は、上皇御所にお仕えしている上臈局のためのものだそう。上臈局は故三条実冬太政大臣の娘さんだ。その写本作りを話し合っている際に、ある人が私に書写させることを提案したそう。「そういう事情だったそうだから、お含み置き下さい」とのことだった。つい先日の事であり、その経緯を改めて知って、恐ろしさに身の毛がよだつ。書写を

引き受けたことを後悔した。

十九日、晴。勾当局から手紙が来た。「源氏物語を書写なさった件で、室町殿がご不快のあまり、伏見宮殿は万死に値すると仰つてます」とお知らせ下さった。びっくり仰天していたら、今度は広橋から書状が来て、「室町殿から貞成様に源氏物語の目録を書いてくださるようにとの仰せがありました」とのことだった。慌てて、「ともかく明日、田向三位を使者にしてご返事します」と、とりあえずの返答をしておいた。

この源氏物語書写の件は、惣得庵主が取り次いできた話だったので、庵主を呼びつけた。庵主はすぐに来たので、証拠として依頼主である水無瀬からの書状を借り受け、それを室町殿にお見せしようということになった。何せ突然のことで、ともかく驚いた。

二十日、明け方に雨が降り、雷が鳴った。田向三位が京に出かけて、広橋へ私の書状を渡した。源氏物語書写の件に関する水無瀬三位入道の書状も、証拠として広橋に手渡した。そして事の次第をありのままに説明させた。なんとかうまく室町殿に説明してくださいたということ、三位から詳しく広橋に申し伝えた。

## 足利義持の戯れ言

夕方、三位から急ぎの書状が送られてきた。それによると、「広橋と対面して詳しく話しましたが、いずれにしても源氏物語の目録を早くお書きくだらないとダメだそうです。ともかくご自筆で書願います」とのことだった。「また、当方が驚き慌てている件に関しても、証拠である水無瀬の書状を室町殿へお見せするよう、広橋に指示いたしました」とも書いてあった。一方、「目録の料紙は

凝ったものでなくてかまいません。ただ引合紙程度でよろしいでしょう」と広橋が助言してきたそうだ。「この件は、どうも上臈局をお笑い種にするための事らしいです」とも書かれてあった。「今日は日が暮れたので、源氏物語の目録は明日早朝に書き上げて、そちらに送る」と返事をおいた。

今出川家の別当局から手紙を頂いた。また勾当局からも手紙が来た。「今回の件は、どうも室町殿がただ上臈局をお笑い種にするためにいろいろとご命令になっているようです。室町殿が上臈局へ出されたご書状の宛名には『木幡殿へ』と書かれてあったそうです。この木幡は伏見の近所の地名なので、このように書かれたようです」と勾当局の手紙には書かれてあった。「単なる戯れ言のようですから、死罪の処罰をするというのは、よもやありませんでしょう」と面々が私にそう言うので、いちおう安心した。

#### 上臈局の前歴

この上臈局は、先年、木寺宮承道親王と密通したことがあった。そのために、木寺宮はお亡くなりになった。上臈局もしばらくの間、謹慎して家に籠もっていた。その後、許されて上皇御所に復帰した。上臈局のことを室町殿が寵愛されていたそうだ。この事件があったので、今回は私に嫌疑をかけたように室町殿はお振る舞いになったようだ。そして、そのこと自体がお戯れだったようだ。薄氷を踏むような時節に、このような事が起こり、とても驚いた。源氏物語を書写したことをとても後悔した。

二十一日、晴。朝早く、広橋へ源氏物語の目録を送った。夕方に、田向三位が帰ってきた。田向によると、朝早く広橋は室町殿御所へ行

ったそうだ。まだ目録が届いていないので、田向も広橋と一緒に御所へ行って待っていたところ、目録が届いた。それをすぐに広橋が室町殿へお目にかけた。「室町殿のご返事は『特に急いで必要だったので、深く考えずお願いしましたところ、問題なくお書きくださったこと、うれしく存じます。いろいろとご不審に思われているでしょうから、詳しいことは広橋がご説明致します』とのことでした。何も問題がないというご返事で、安心しました。特に室町殿が不快に思っていないというご返事で、安心しました。ただ上臈局を笑い種になさるおつもりで、目録をお求めになっていたそうです」と広橋が言っていたそうだ。上臈局が室町殿直筆の目録をお願いしていたので、そのために私に目録のお手本をお願いしたという次第だそう

だ。惣得庵主が酒樽をもって来た。「この件が無事済んで、安心しました。お慶び申し上げます」とのことだった。「今回の件は私が取り次ぎしたせいであり、面目次第もございません」と慌てた様子で、謝っていた。

二十二日、晴。正親町三条公雅大納言に書状を出した。源氏物語書写の件について後小松上皇様へうまく事情を説明してほしいと頼んだ。また長橋局にも同じように頼んでおいた。

#### 信濃国五個荘

二十三日、晴。後小松上皇様へ冷泉永基を通して書状を差し上げた。今回の源氏物語の経緯を説明し、信濃国五個荘の件(※)についてお願いをした。

※信濃国五個荘の件：応永二十四年九月二十五日条を参照のこと。



二十四日、晴。風呂に入った。さて一色義範左京大夫が山城国守護に任命されたそうだ。

二十五日、晴。永円寺長老が来たので、対面した。お茶三十袋と一献料としての銭の寄贈目録を献上してきた。これは武蔵堀池の年貢を同寺に寄付する書類をだしたお礼だそうだ。今日は毎月恒例の連歌会で、当番の幹事は田向長資朝臣だ。連歌会の参加者はいつも通りである。連歌会の前の一献の酒宴など、通例通り行われた。

二十六日、今出川家に仕えている女房の別当は、今出川公富中納言の母親である。その別当が春から病気であつた。それが最近とても重態になったので、出家したそうだ。とてもかわいそうだ。今出川左大臣や中納言にお見舞いの使者を送った。

崇光天皇の皇女で景愛寺住職である瑞室殿がそろそろご隠居なさるらしい。心ばかりの品としてお茶を一袋お贈りした。

#### 一色義範山城国守護の軍勢催促

二十七日、晴。山城国守護の一色義範から伏見荘の村人たち宛ての命令書が見見宮家に届いた。「石清水八幡宮の訴訟騒ぎのため、山城国中を警備しなければならなくなりました。それで御領地である伏見荘の役人や名主たちにも守護の軍勢に加わって働いていただきました」との申し入れである。伏見荘は守護不入の所領なので、ご加勢できませんと、とりあえず返答をしておいた。

#### 備中国園東荘・園西荘

さて園西荘に関して、富田中務丞が報告に来た。「現在の管領である細川満元の家臣が、理覚院の代官ということで園西荘の現地管理をしています。まず伏見宮様から管領殿に私が現地を管理する旨、

お話を通していただきましたく存じます。その後、私の方で現地の管理を進めようと思います」と言ってきた。「一方の園東荘は梅津長福寺が管理しているので、私が実力で同荘に入って、現地の管理を進めます」とのことだった。私の方からは「了解した。管領には私の方から何とか話をつけておこう」と返答しておいた。

二十九日、晴。田向三位が京都へ出かけた。一色義範山城国守護の警備活動を慰労するため、太刀一振りを与えに行ったのである。また侍所長官補佐の三方範忠にも一献分の酒樽などを与えた。

伏見荘の役人や名主らが軍事の役を勤めることは先例がないことを改めて伝えさせた。しかし一色が言うには、「官位や権力のある家の領地でも、例外なく軍事の役を勤めさせなさい」と室町殿の命令書に書いてあります、ということだった。後日になつて揉めるのは煩わしいと思ったので、「わかりました。それでは役人の軍事役については逃れるのは難しいようですね。その代わり名主たちの軍事役免除については御理解ください」と田向は返事をしたという。

#### 新順事の開始

今夜から、順番で薪を焚いて暖を取る会を始めた。いつものように田向長資朝臣が薪の準備をした。

十一月一日、晴。「良い兆しがあり、すべてのことが幸せだ」と予祝した。後小松上皇様へ蜜柑二籠を、いつものように冷泉永基朝臣を通してお贈りした。すぐに上皇様直筆のお返事が来た。「文字通り上皇様は喜びである」と近臣が上皇様のご意向を示す形で、お返事は書かれていた。世尊寺行豊朝臣が北野天満宮へ奉納する和歌百首の題を書いて寄こした。

さて山城国守護代の三方範忠山城入道の軍勢三百騎あまりが領国若狭国から山城国に入り、甲冑を帯びた臨戦態勢で淀に着いたそう  
だ。美豆に城郭を構えて居住するらしい。伏見荘の守護に対する軍  
事役は、当面、免除された。

### 今出川別当の死

聞くところによると、今出川公富中納言の母である別当が、今日  
亡くなったそう。とてもかわいそう。私が今出川家に長年寄宿  
している時に、慣れ親しんだ方である。だから悲しみは少なくない。  
夫である今出川公行左大臣や息子の中納言の悲しみに至っては、か  
えって言うも愚かである。上皇様へご許可を頂いて数日間、今出川  
左大臣らは家に籠もるそうである。

四日、晴。北野天満宮へ奉納する和歌百首を、皆から求めるため、あ  
ちこちに和歌の題を配った。配った先は十九人である。

五日、晴。妙法院門跡殿が伏見の松をご所望だということで、松の木  
十三本を差し上げた。

豊原郷秋が来たので、音楽会を開いた。宗明楽・採桑老（楽拍子）  
・蘇合序（十二拍子）・蘇合三帖・五帖破急・万秋楽序破・蘇莫者  
序破・輪台・青海波・竹林楽を演奏した。いつものように田向長資  
朝臣が大鼓を打った。

### 百日楽

郷秋が語るところによると、山井景房の屋敷で百日楽（※）をし  
たという。先日、一日だけで、六調子すべてにわたり雅楽の曲百曲  
を吹いたそう。それも大曲ばかりで、小曲は演奏しなかった（※）。  
参加者は、園基秀前参議・同基世侍従・山井景房・豊原家秋・同郷

秋・同敦秋・山井景房らであった。園はこの日始めてこの練習に加  
わったそう。このことが後小松上皇様のお耳に達し、この時の演  
奏曲リストを取り寄せて、ご覧になったそう。一生懸命練習する  
のは良いことだと上皇様はお褒めになったという。

※「百日楽」：百日間または百曲、雅楽の練習をすることか。

※「大曲」・「小曲」：原文では「大楽」・「小楽」とある。

六日、晴。法安寺の風呂に入れてくれるよう希望した。父・大通院の  
三回忌なので、今日からお経を読み始めた。法安寺の風呂に周乾首  
座や田向三位らとともに入った。入浴後、一献の酒宴があった。法  
安寺住職らが丁寧に準備してくれており、うれしかった。

### 足利義持、石山寺や琵琶湖上で法会を営む

八日、晴。室町殿が石山寺へお参りしたそう。石山寺では三十三人  
の僧侶に観音懺法を行わせたという。また琵琶湖の船上で、観音經  
三百三十三巻を読誦させた。これらの法会は、称光天皇陛下の病氣  
平癒の立願がなつたので、そのお礼として行われたものだという。

田向三位の屋敷で今夜から七日間仏事がある。三位の母親の十三  
回忌の法要だそう。

今夜、三郎丸が成人式をあげた。小川禅啓が後見人として烏帽子  
を被せたという。

九日、晴。勧修寺経興が播磨国国衙領（※）の領地調査に関して書状  
を寄こした。今年の播磨国は大不作だという。しかし、今年中に土  
地調査は実行することを、播磨国守護の赤松義則が現地に命令した  
そう。赤松から勧修寺へそのように連絡が入ったと、勧修寺が知  
らせてきた。

※国衙領（こくがりよう）：各国の国府の所領。公領ともいう。室町時代の国衙領は、既に国府が衰退しているので、荘園と同じような私領になっている。播磨国（兵庫県）の国衙領は、伏見宮家の領地。  
**栄仁親王追善一筆書写の法華経**

十二日、晴。単独で書写してきた法華経の写経が、今日で終了した。この八月十八日から今日十二日に至るまで写経してきた。親孝行をしたいという気持ちに励まされて、ただひたすら写経をしてきたのである。

十三日、一日中寒い風が吹きまくっていた。大通院の三回忌法要が今日から始まった。午後七時、法要の読経の時間になった。読経は、周乾首座・行蔵庵寿蔵主・即成院善基・周郷・稚児の梵祐・塔頭御寮・玄経・香雲庵主ら、その他宮家の男女らがいつものように順番で行った。冷泉正永が来た。

聞くところによると、室町殿が石清水八幡宮にお籠もりになったそうだ。お供は、広橋兼宣大納言・日野有光中納言と殿上人六人だそうだ。今度の十五日に石清水八幡宮放生会は必ずや執行されるとのことだ。

十四日、晴。田向三位家の私的な仏事が終了した。その後、三位と長資朝臣は石清水八幡宮に向かった。洪蔭蔵主がいらっしゃった。三回忌の仏事中、伏見にご滞在だそうだ。

十五日、晴。石清水八幡宮放生会である。執行責任者の公卿は徳大寺実盛中納言、参議役は西園寺実光参議兼近衛中将、警護役は田向長資朝臣、事務担当役は勤修寺経興である。午前五時、お神輿の巡行が始まった。室町殿がお籠もりになっているので、すべてにおいて

厳肅に神事は執り行われたそうだ。夕方になって、田向三位と長資朝臣が伏見に戻ってきた。

十七日、晴。勾当局が木版印刷された金剛経一卷にお布施を加えてお送り下さった。この金剛経は大通院の書状の裏に印刷したもので、後小松上皇様が直筆で表題がお書き加え下さった。勾当局が父にお仕えて下さった労苦やこのような懇切丁寧なお志に嬉しく感動した。対御方もご仏事の費用を下さった。

#### 一条経嗣関白の死

さて今日、一条経嗣関白殿がお亡くなりになった。有職故実や漢籍にずば抜けて詳しい方だった。公家の鏡であり、天下の重臣としてこの人の右に出る者はいない。とてもとても惜しいことである。享年は六十一歳だそうだ。

十八日、晴。惣得庵主や明元たちが軽食を持参してきた。一緒にお酒を飲んだ。景愛寺の前住職が円覚経一卷に錢二貫文のお布施を加えて、お送り下さった。前住職は明日のご焼香にいらっしゃるそうだ。綾小路信俊前参議が来て、御仏事料を献上した。蔵光庵主がお茶菓子などを献上してきた。皆々のご芳志は別紙に書き止めた。

#### 琵琶法師の妙一座頭

夕方、風呂に入った。夜になって、洪蔭蔵主や田向三位たちがちよつとした酒宴を準備してくれた。田向三位の妻である芝殿も来た。琵琶法師の妙一座頭が来て、仏前で平家物語を一、二句語った。聴衆が大勢集まった。

#### 栄仁親王三回忌法要最終日

十九日、晴。崇光天皇の皇女である栄寿院殿がいらっしゃった。三条

実継前内大臣の娘である円修坊がお供で来た。茶菓子などいろいろな物を下さった。同じく崇光天皇の皇女である景愛寺前住職の瑞室殿もいらつしやった。麗首座がお供してきた。惣得庵主も来た。皆が集まって、一献の酒宴となった。西大路隆富朝臣が来て、御仏事料を献上した。

大光明寺の法要七日目で、今日が最終日である。そのため、一時間ほどお経を聞きに参列した。綾小路信俊前参議・綾小路三位(田向経良)・田向長資朝臣・西大路隆富・冷泉正永らも一緒に連れて行った。お経が終わってから、大光明寺長老にお会いして、すぐに帰った。景愛寺前住職瑞室殿も同じく大光明寺へお入りになり、焼香なさった。

さて後小松上皇様が、この法要のご助成として二十貫文下さった。別当局が上皇様の命令書を執筆して、冷泉永基に託された。常日頃、経済的に苦しい内情を上皇様には嘆き入れていた。それで今回ご助成下さり、外聞としても内情としても、とてもありがたいことである。その一方で思いがけないことだったので、どうお返事してよいか戸惑ってしまった。それで、有難く思っているとうまい具合に上皇様へお返事しておいて下さいと冷泉永基に申し付けた。

### 観音懺法

この上皇様のご助成が来たので、にわかに観音懺法を今夜執行しました。と皆が話し合った。それで導師などの手配を大光明寺に命じた。榮寿院殿は既にお帰りになっており、景愛寺前住職瑞室殿は伏見にお泊まりになっている。夕方に、道場を設営した。大光明寺の僧侶らが来て、お経を読んだ。その後、夜になって、観音懺法が

始まった。導師は大光明寺長老で、香華の役は都維那、懺法衆は周乾首座・洪蔭藏主以下十四人の僧だった。この僧侶たちの名前は、別紙に記録した。懺法が終わって、長老にお会いした。僧侶達には薬酒を与えた。懺法はとてもすばらしく、参列者は大勢だった。

### 琵琶法師の椿一檢校

椿一檢校が来て、仏前で平家物語を二、三句語った。芝殿や惣得庵主らは、今夜宮家に泊まるそうだ。

### 伏見宮家での法要

二十日、晴。朝早く大光明寺長老・藏光庵主・退藏庵主以下僧侶二十人が来た。軽食後に琵琶法師の椿一檢校が平家物語を語った。大光明寺長老以下六、七人の僧たちがこれを聞いた。平家物語二、三句終わってから、長老たちは先に帰っていった。景愛寺前住職瑞室殿は、お経をお聞きになることもなく、急いでお寺にお帰りになった。少ししてから別の僧たち来たので、まず軽食を出した。道場が狭いので、はじめに大光明寺長老ら僧二十人に来てもらい、軽食を出したのである。その軽食が終わった後に、その他の僧たちに来てもらって、軽食を出した次第である。

この軽食が終わってから、寺庵の僧たち四十人あまりが来た。お経を読む僧の人数が多いので、何人かは庭に出てもらい、そこに並んでお経を読んでもらった。お経が終わってから、その功德を亡き父に手向けた。僧たちが帰っていった。そして仏前に焼香した。焼香後すぐに道場をかたづけて、もとの部屋に戻した。

安樂光院で法華經一部を一日で写経させた。今出川家の陽明局と綾小路信俊前参議が今回の法要のために手配したのである。伏見荘

内の寺庵の僧たちがほとんど全員この法要に参加してくれた。

さて軽食手配の件であるが、以前は行藏庵寿藏主が手配してくれていた。しかし今度はこの役をかく辞退してきたので、今回は広時にやらせた。

### 貞成の反省

また今日の軽食のとり方について記しておく。まず道場で僧たちに軽食を食べさせた。そして私の前で、宮家の女性たちや惣得庵主以下が軽食を食べた。しかし、綾小路前参議と田向三位たちは私の前では食えず、別の場所では軽食をとった。私は綾小路前参議たちを私の前に呼ばなかった。「別の寒々しい場所で軽食を食べさせられたのは、ひどい扱いだ」と言って、怒っていたそう。また綾小路たちと同じ部屋で、椿一検校も軽食をとった。「琵琶法師ごとと一緒に軽食を食べさせられるとは、失礼極まりない」ということで、綾小路たちはさらに怒っていたようだ。もっともなことである。綾小路たちを私の前に呼ぶべきであったが、宮家の女性たちや尼たちで道場がほとんど埋まってしまっていたのだ。それで、綾小路たちを呼ぶつもりでありながら、呼ばずじまいに終わってしまったのである。いずれにせよ、これは私の越度である。今後のために、記しておく。とても良くないことだった。

椎野寺主が仏事が終わってからやってきた。何でそのようになされたのか、私には理解できない。今回、宮家御所での法要には参加せず、浄金剛院で七日間、特別の法要をしていたと、椎野寺主は言っていたが。

夕方、また平家語りがあった。二、三句語った後、周乾首座ら

皆々が帰っていった。西大路隆富も帰っていった。今回の法要が無事に終わった。後小松上皇様からご助成をいただいて、法要をやり遂げることが出来たのも、うれしい限りである。

### 京都、土御門大路・高倉通交差点付近で火事

二十一日、晴。後小松上皇様のご助成に感謝して、祝宴をした。一献の酒宴の間、平家物語を語らせた。聴衆が大勢来た。祝宴の後、台所で平家物語を語らせた。深夜に至るまで酒宴は続いた。今夜、京都の土御門大路と高倉通の交差点付近で火事があったそう。女官阿五の実家もこの火事で焼けてしまったそう。

二十二日、晴。冷泉正永が帰っていった。後小松上皇様のご助成を冷泉永基が取り次いでくれたので、ご助成の錢の一部を少しだけだがお裾分けとして与えた。これで冷泉家でもお祝いをしてくれるよう、伝えた。そうしたら、「考えるところがございまして」と言って、錢を返してきた。たびたび錢を送りつけても全く受け取ろうとしな

いのは、何か理由があるらしい。

夜に順番で薪を燃やす会をした。いつものように、当番となった今上臈が薪の用意をした。

二十三日、晴。朝早く音楽会をした。平調の曲五つや朗詠などをした。綾小路信俊前参議と一緒に演奏した。音楽会が終わると、綾小路は帰っていった。

### 土倉宝泉の妻、死去

聞くところによると、土倉の宝泉の妻が亡くなったそう。この一日に出産したが、それ以後、病気になるていたそう。

二十四日、朝、雨が降った。夕方には初雪が降った。近衛局や田向三



位らが軽く雪見酒の用意をしてくれた。

さて、後小松上皇様のご助成に對して、お礼をまだ直接申し入れていないので、今日、私がお礼状を書いて、いつものように冷泉永基に託した。

### 富樫満成の没落

さて聞くところによると、富樫満成兵部大輔が今日の明け方、幕臣としての身分を剥奪されたそう。室町殿が北野天満宮にお籠もりになっている最中に、厳しく咎められたという。富樫はこのところ、權威を笠に着て傍若無人の振る舞いが甚だしかったが、突如、一転してその身分を失った。今更ながら、人の世の儚さに驚かされた。

また聞くところによると、東南院宮觀覚法親王殿がお亡くなりになったそう。この方は、梶尾の義仁親王の子であった。

### 和漢連句の連歌会

二十五日、晴。寒い風が吹き荒れた。椎野寺主が主催する連歌会があった。僧侶も参加していたので、和漢連句をした。参加者は、私・椎野寺主・周乾首座・洪蔭藏主・田向経良三位・庭田重有朝臣・田向長資朝臣・行藏庵寿藏主・周郷・即成院善基・行光らであった。午後九時に百韻が終わった。

### 尼林歌局の直訴

さて富樫満成が京都から逃げ出した件の続報である。富樫は、故足利義嗣押小路大納言禪門に謀叛を勧めたらしい。その後、足利義嗣の謀叛が明らかになると、一転して足利義嗣を殺害する準備をしていたそう。また足利義嗣の愛妾である林歌局に恋文を送り、密

通もしていたようだ。室町殿が北野天満宮にお籠もりしている間、これらの事を厄となった林歌局が室町殿に直訴したという。それで富樫は政治生命を絶たれて、出家して高野山に隠れたようだ。

### 性藏主の暗殺

また聞くところによると、最近、性藏主が殺害されたらしい。この人もまた僧侶のなかでは室町殿の覚えがめでたかった人だった。ところが昨年、室町殿の意に背くことをして、隠居していたそう。二十六日、雪が降った。その雪景色にとても趣があった。周乾首座が来て、酒宴をお開きになった。一献が終わって、周乾首座・洪蔭藏主・田向三位・重有・長資ら朝臣たちが指月庵へ行き、和漢連句を一折りしたそう。私が行かなかったのは、残念であった。

さて母の別当を亡くして悲嘆に暮れている今出川公富中納言にお見舞いの使者を送った。少しであるがお見舞いの錢も送った。たいへんありがたいことだと返事があった。

二十七日、晴。周乾首座と洪蔭藏主が京都の嵯峨へお帰りになった。三十日、晴。十種のお香を聞き当てる遊びに賞品を提供した。私・椎野寺主・田向三位らがこの遊びに参加した。庭田重有朝臣が一番、香を聞き当てた。

十二月一日、晴。「良い兆しがあり、とても幸せだ」と予祝した。月初めのお祝いをいつものように行った。

### 勝阿の形見

二日、晴。祐譽律師が一献分のお酒をもって来た。故勝阿の四十九日の法要(※)が昨日で終わったという。その関係で、急いでやって来ましたと言ってきた。「形見の品として手箱を一つ、貞成様に献

上したいと生前、勝阿が言っていたので、お持ちしました」と言う。

その箱は、齒の粗い解き櫛やはさみなどを蒔絵で描いたもので、もととは萩原宮直仁親王の持ち物だったそう。ありがたいことである。祐譽は、酒を一献飲んでから、帰っていった。祐譽には、このたびの慰労として青銅製の花瓶と香台を特に与えた。

豊原郷秋が来たので、夜に音楽会をした。一越調の曲を十曲、演奏した。田向長資朝臣がいつものように大鼓を打った。

### 大臣任命の儀式

さて今夜、朝廷で大臣任命の儀式があったそう。儀式を司る首席の公卿は、三条公光大納言だ。九条満教右大臣が関白兼左大臣に任命された。徳大寺公俊左大將が右大臣に任命された。中山満親前大納言が大納言に復職した。清閑寺家俊参議が中納言に昇進した。三条西公保蔵人頭兼近衛中将が参議に昇進した。広橋藤光右中弁が蔵人頭を兼任することになったそう。今出川公行左大臣は、先月二十八日に左大臣を辞任している（※）。室町殿足利義持殿は内大臣のままであった。

※「四十九日の法要」：原文では「五旬の儀」（五十日間の法要）とある。応永二十四年一月四日条でも四十九日のことを「五旬」と記している。

※「今出川公行左大臣は、先月二十八日に左大臣を辞任している」：『公卿補任』によると、この十二月二日に辞任したことになっている。

### 伏見莊北土蔵に強盜が入る

四日、晴。大光明寺の風呂に入った。さて今夜、北土蔵へ強盜が来て、

財物を盗もうとした。ただし強盜は蔵の中に入らなかったそう。強盜を一人も捕らえたり殺すことが出来なかったのは、村人たちがしっかりとしていなかったせいである。

六日、晴。後小松上皇様から先日のお返事が届いた。さて四日の強盜の犯人が誰であるか、取り調べることになった。伏見莊の村人たちが全員が御香宮に集まり、「私は盗犯ではありません」という事を記した誓約書に、それぞれが花押をした。この誓約の内容に対して嘘をついた場合、神様の罰が当たるはずだが、その場では誰にも罰が当たった様子はなかった。

### 若狭国松永莊

七日、晴。若狭国松永莊は、伏見宮家が勝阿に与えた領地である。この松永莊を、現在、祐譽律師が相続して支配している。今回、伏見宮家三代目である私の相続承認書がほしいと祐譽がお願いしてきたので、今日、親王家としての体裁による承認書を与えた。この承認書は、庭田重有朝臣に書かせた。

九日、晴れていたが、寒い嵐が吹き荒れた。夜、順番で薪を燃やす会をした。私の妻である今参局が当番で、いつものように薪の用意をした。薪が燃えている間に、連歌を懷紙一折り分おこなった。この連歌会には、私の他、椎野寺主や田向三位らが参加した。人数が少なかったたので、ただ一折り分詠んだだけで終わった。

### 貞成母の命日

十日、晴。亡くなった母の命日なので、身を淨めた。大光明寺の塔頭で形だけのささやかな法要をした。塔頭御寮恵芳は京へ出かけていた。三条冬実玉櫛禪門の病気が重いそう。かわいそうなことである。



さて新内侍が今日、皇女を安産したそうだ。皇子がいない称光天皇陛下としては、皇女では用をなさないということになるう。

十一日、晴。椎野寺主が寺へ帰った。

#### 播磨国市別符

十二日、曇。夕方に雪やみぞれが降った。田向三位が京へでかけた。

播磨国市別符のことで広橋と相談したところ、市別符の支配のために私の書状を頂きたいと申してきた。そこで田向が使者となって私の書状を広橋に届けたのである。そのついでに、田向を九条家へ行かせて、関白就任のお祝いを言わせた。

十三日、晴。田向三位が帰ってきた。広橋は、きちんと市別符を支配しますと言っていたそうだ。九条関白殿の屋敷では、八条季興朝臣が取り次いでくれた。「このようにお祝いして下さり、嬉しいです」との返事だったそうだ。

#### 日遊神

十四日、晴。吉日なので煤払いをした。そしていつものようにお祝いをした。日遊神(※)が家の中に留まっている間は煤払いをしてはいけないと陰陽師が言っている。十七日以降年内はその日遊神が家の中に留まっている期間に当たるので、いささか早いが今日煤払いをしたのである。

※日遊神(にちゆうしん)：陰陽道の神の一つ。天一神が天上に帰っている間、代わりに日遊神が地上に降りて家の中に留まるとされる。その期間は家の中を清潔にしなければ日遊神の祟りがあるとされている。

十五日、晴。安楽光院長老が歳末の礼を言いに来たそうだ。会わなか

った。聞くとところによると、奈良で唯摩会が始まったそうだ。事務担当役は勧修寺経興だという。

#### 常光国師十三回忌法要

十六日、晴。今日、相国寺でお経を略読して供養する法会があった。

その法会で、舞のない雅楽の曲が一曲、手向けられたそうだ。説法をしたのは建仁寺長老、お香の後、追悼文を朗読したのは天龍寺長老だという。常光国師の十三回忌が来年の正月十六日だそうだ。それを繰り上げて、今日行ったという。

さて大工の源内が来た。塗籠(ぬりごめ)の部屋を修理させた。

十七日、晴。塗籠の修理が終わった。当番の庭田重有朝臣がいつも通りに薪を燃やす会の用意をした。

#### 治仁王長女の出家・三女の髪置

十八日、晴。兄・葆光院治仁王の三番目の姫宮は、二歳になる。今日、この子の髪を伸ばす儀式を行った。田向三位が取り仕切ってくれた。そしていつものようにお祝いをした。

さて治仁王の一番目の姫宮を仁和寺鳴滝殿に入れる契約が整った。年内で鳴滝殿に入るのに良い日次を陰陽師の賀茂在弘に占わせたと、この二十六日が吉日だという。この日程で行うことにしましたと、今日、鳴滝殿へ申し入れた。

聞くとところによると、室町殿が朝廷へ参られて、称光天皇陛下が勾当局をお許しになれるよう、お取り計らいになったそうだ。まずはめでたいことである。

#### 相国寺鎮守社の火災

今夜、相国寺の鎮守社である伊勢社・八幡社・春日社が火事にな

った。巫女の家から出火したようだ。相国寺長老は真つ先にお逃げになったが、しばらくして呼び返されたそうだ。

十九日、晴。百日間の琵琶と和歌の練習が、今日、無事に終わった。

二十日、雨が降った。賀茂在弘が新しい暦や占いの本などを献上してきた。

#### 藤原能子勾当局、許される

さて今夜、称光天皇陛下は勾当局をお許しになった。それで、勾当局は陛下の御前に呼び出されたそうだ。これもすべて室町殿のご手配によるものである。勾当局はこの夏からずっと謹慎していて、かわいそうであった。しかし、許されたと聞いて、とても嬉しい。この一件（新内侍懷妊事件）で疑いをかけられた伏見宮家としても私も臣下も皆、無事、嫌疑が晴れた。これはすべて、神様の思召しによるものである。新内侍自身については、お咎めはないようだ。今回、新内侍が出産した女の子を皇女とするかどうかは未定だという。

二十一日、晴。豊原郷秋が来たので、音楽会をした。慶雲楽・万歳楽（楽拍子）・三台破・三台急・皇響急・廻忽・五常楽序破急・勇勝急などを演奏した。田向長資朝臣が大鼓を打った。夜に薪を燃やす会があった。対御方が当番で、いつも通りに薪を用意した。

二十二日、晴。夜に雨が降った。薪を燃やす会で、田向三位が当番として、いつも通りに薪を用意した。連歌会があった。参加者はいつもの通りである。午後九時に百韻が終わった。今回の連歌会は、年忌の供養として行った。面白かった。

二十三日、晴。今夜は朝廷で内侍所の御神樂があるそうだ。綾小路信

俊前参議は御神樂に参列しないそうだ。

#### 玉櫛禪門の死

さて今日、玉櫛禪門が亡くなった。この秋から病気を患っていた。たいへんかわいそうだ。心ばえが穏やかな人で、酒席ではとても楽しい人であった。もっとも惜しい人を亡くしたものだ。享年六十六歳だそうだ。玉櫛禪門は亡くなった父・大通院とも昵懇だったので、特に悲しみが深い。塔頭御寮惠芳は急いで宮家から退出して、寺にお籠もりした。惠芳は玉櫛禪門の娘なのである。

二十四日、晴。今日、代官の山坊経増律師から播磨国飾磨津別符の年貢が送られてきた。室町女院領の再興をして初めての年貢収納である。めでたいことだ。後小松上皇様へ年末のお礼を申し入れた。

二十五日、晴。十二月（※）なので身を浄めるため、いつものように風呂に入った。薪を燃やす会で、当番の近衛局がいつものように薪を用意した。芝殿や惣得庵主が来たが、すぐに帰っていった。

※「十二月」：原文では「旧月」とある。これを「窮月」（十二月の異称）の宛字と解した。

#### 治仁王姫宮の出家

二十六日、晴。兄・葆光院の長女で七歳の姫宮が、十地院殿にお入りになった。十地院殿は鳴滝ともいい、その住職は萩原殿直仁親王の娘さんである。今回の出家は、ごく内々の事として行われた。香雲庵主が姫宮のお供をした。しかし宮家の侍臣は一人も付いていなかった。あくまでも、ごく内密の事だからである。無事、到着したということ、まずはめでたい。

綾小路信俊前参議が来たので、すぐに音楽会を始めた。太食調の

曲を三曲演奏しただけで、綾小路は帰っていった。明日、清和院で上皇様の御願による法要のための音楽会がある。演奏者は室町殿から指名されている。綾小路も演奏するように指名された一人であるので、急いで帰るのだという。

### 貞成姫宮の髪削ぎ・真魚始め

さて私の三歳になる姫宮の、真魚（まな）始めや髪削ぎなど、お祝いの儀式をした。前もって陰陽師の賀茂在弘卿に吉日を占ってもらっていた。それによると、今日の午後五時が良いとのことだった。まず髪削ぎの儀式で、田向長資朝臣が髪を切り揃える役をした。次に真魚始めの儀式で、田向経良三位が姫宮に魚を食べさせた。給仕役は庭田重有朝臣である。二つの饗膳や脇膳などは通常通りであったが、儀式のほとんどは略式で行った。一献の酒宴が重なって五献の祝宴となった。酒宴の費用を助成献上してくれたのは、近衛局・綾小路前参議・田向三位・重有朝臣・小川禅啓らである。お祝いの会を開くことができて、うれしい。

### 庭田重有娘の宮家出仕

さて庭田重有朝臣の七歳の娘が、今夜から伏見宮家に仕えることになった。まだ幼い娘であるが、父・重有の要望により宮家に置くことにした。

二十七日、晴。田向三位が京都に出かけた。常宗を通して、室町殿へ年末のお礼を申し入れるためである。祐誉が一献の酒を持ってきた。香雲庵主が帰ってきて、鳴滝殿での様子を話してくれた。すべて無事にうまく行ったそうだ。

### 三木善理の訴訟

さて昨晚、三方範忠入道の使者が来た。三木善理が四箇条に涉る訴訟を起こしたという。そのため、室町殿から命じられて使者を送ったのだという。要するに、伏見荘現地を指揮した田向三位と政所役の小川禅啓の所行に問題があったので、処罰してほしいということに訴状に載せたというわけである。もちろんこの訴えは問題外のことで、返事を簡条書きにして渡した。三方の使者にも詳しい事情を話しておいた。三木の訴えのうち、一箇条だけは問題なく受け入れると答えておいた。

二十八日、晴。陰陽師の土御門泰継朝臣が来年の暦や占いの本などを献上してきた。

### 貢馬御覽での出来事

田向三位が帰ってきた。昨夜の室町殿の貢馬御覽を、田向は見物したそうだ。赤松義則が献上した七番目の貢馬が気の強い馬だった。近衛府の役人が乗ろうとしたら、暴れ回って、まったく寄せ付けない。大勢で取り押さえて、ようやく乗ることが出来たそうだ。このような強情な馬は、他にも二頭いたという。

勸修寺経興が播磨国国衙領の租税である特産品などをいつものように献上してきた。

晦日（二十九日）、晴。風が吹いた。朝早く御香宮へ重有朝臣らをお供に連れて参詣した。大光明寺長老や寺庵主たちが年末のお礼に来た。皆と対面した。蔵光庵主が年末の進物を献上してきた。陰陽師の土御門有清がはじめて来年の暦や占いの本などを献上してきた。有清は「一生懸命ご祈禱いたします」と申した。神妙なことである。除夜のお祝いをした。明春が良いことがあって満足することをひた

すら念願した。

伏見宮家でのいろいろな事柄や世間でのうわさ話などを、詳しく記録した。後々見られると差し障りがある。決して他家の者に見せてはいけない。連歌の懷紙の裏にこの日記を記した。後で連歌懷紙を読み返すために、懷紙の順番を乱さず、正しい順番で懷紙を貼りついでおいたのである。

（続）

『看聞日記』現代語訳（八）（『山形県立米沢女子短期大学紀要』五二号、二〇一六年）正誤表

ご教示下さった榎原雅治氏に感謝します。

○（応永二十五年）五月十五日条

誤

小倉公種前中納言は小河殿を介護していた。

正

小河殿は生前、小倉公種前中納言を家来にしていた。

○五月十六日条

誤

小河殿には息子はあるのだが、相続を放棄したという。娘は室町殿の若君に嫁いでいる。領地などは、婿である室町殿若君にすべて譲られるそうだ。小河殿に近習奉公している者たちは全員、この若君にお仕

えするよう、小河殿自らが遺言なされたそうだ。

正

小河殿には息子がいるのだが、その子に相続させない。「私の娘を室町殿若君に嫁がせ、その智となった若君に領地などをすべてお譲りする。私の近臣らはこの若君にお仕えしなさい」と小河殿が遺言なされたそうだ。

誤

朝廷の関係者は室町殿の御所に来てはいけなと、室町殿がおっしゃっているそうだ。それで、室町殿の命を受けた広橋兼宣卿が常宗に三十日間御所へは立ち寄らないようにと指示したという。広橋卿だけは御所への出入りが許されているらしい。

正

「公家は室町殿の御所に来てはいけなと、室町殿がおっしゃいました。そのため私は三十日間室町殿には行けません。それで室町殿へのお悔やみは広橋兼宣卿を通してお伝え下さい」と常宗は助言してくれた。広橋卿だけは室町殿御所への出入りが許されているらしい。

○五月二十六日条

誤

さて飾磨津別府のことで、守護請をしている赤松小寺入道性広から連絡があった。萩原宮直仁親王の娘である平岡御比丘尼が赤松小寺入道の収納作業に異を唱えているそうだ。重ねて詳細な指示を小寺に伝えた。

正

さて飾磨津別符のことで、赤松小寺入道性応から連絡があった。萩原宮直仁親王の娘である平岡御比丘尼が赤松小寺入道の代官就任に異を唱えているようだ。重ねて詳細な指示を小寺に伝えた。

○六月六日条

誤

どうも青蓮院の義円や仁和寺御室の永助法親王にはいずれもお弟子がいないので、男の子は大事だと目を付けられているようだ。室町殿は、「伏見宮家に男の子がいるといううわさを聞いたので、本当かどうか尋ねてみたのだ」と仰ったそうだ。「男の子は一人もおりません」と田向三位は広橋に答えたという。ところが広橋は隠しているのではないかと内心まだ疑っているらしい。

正

「青蓮院の義円や仁和寺御室の永助法親王にはいずれもお弟子がいないので、皇子は大切だ。伏見宮家に男児がいるとうわさで聞いたので、本当かどうか尋ねなさい」と室町殿は仰ったそうだ。「男の子は一人もおりません」と田向三位は広橋に答えたという。ところが広橋は「室町殿のお尋ねの件については」隠しておいた方がよいのではないかと考えているとのことだ。

○六月十日条

誤

侍所所司代の一色義範に返事を出したところ、また書状が来た。三木

と伏見荘政所禅啓の兩人を召喚して尋問すべきだと侍所所司の富樫満成が仰っているので、召喚しないわけにはいかないという内容だった。

正

侍所頭人の一色義範に返事を出したところ、また書状が来た。三木と伏見荘政所禅啓の兩人を召喚して尋問すべきだと富樫満成を通して室町殿がお命じになっている。それなので、召喚しないわけにはいかないという内容だった。

○六月十二日条

誤

三木は所司代を怖がっているのだろう。

正

三木は畠山を怖がっているのだろう。

誤

侍所所司代の無責任な措置

正

侍所頭人が將軍の命令をかたっているだけではないだろうか。

誤

この広橋について、落書(※)の札が立ったという。その内容は「最近の広橋は、人の訴訟をとりつがない」というものだった。

正

広橋を批判する落書(※)の札が立ったので、最近は人の訴訟を取り

次がないようにしているという。

○六月十三日条

誤

北九州の筑紫へ逃げたといううわさもある。

正

九州へ逃げるのではないかとうわさされている。

○六月二十二日条

誤 お茶と五種類の茶菓子など

正 干し飯と瓜など

○六月二十四日条

誤 三十三回忌 正 十三回忌

○七月一日・二日・七日・十日条

誤 太鼓 正 大鼓

○七月七日条

【対応】 誤 山村景親 正 山井景親

○七月十日条

誤

新内侍が妊娠した件に伏見宮家関わっているは全くの事実無根だと皆が言っているそう。いずれにせよ、言いがかりをつけられたこと

は残念なことである。

正

新内侍の懐妊のことについて、宮家関わっているというでたらめが盛んに取沙汰されているそう。全くもって宮家をおとしめる偽りに過ぎず、どうしようもないことだ。

○七月十二日・二十五日条

誤 身分が低い侍 正 侍

誤

教基を呼んで確かめたところ、その通りですとの返事だった。

正

「教基をこちらに寄こして下さい。私から望みを尋ねてみましょう」と返事した。

○七月十四日条

誤

お相手は伏見宮貞成様であるのは間違いないところだろう。

正

お相手が伏見宮様であるのは間違いないだろうと噂されている。

○七月十六日条

誤

伏見宮家に仕える者どもを調べる

もって中傷で、驚くばかりだ」と常宗は語ったそう。

正

伏見宮家に仕える者どもを調べなさい

誤

○七月十七日条

常宗は、昨日書いた私の書状を広橋のところへ持っていき、詳しい説明をしたそう。広橋は、今日の朝のうちに、室町殿にお見せすると

誤

言っていたそう。

常日頃も、またその当時も

正

正

常宗は、昨日書いた私の書状を夕べ広橋のところへ持っていき、詳しい説明をしたそう。そして広橋に今朝のうちに、室町殿にお見せするように言ったそう。

これまでも、そして現在でも、

○七月二十二日条

新内侍懐妊疑惑の真相

誤

誤

「後小松上皇様から新内侍に関する事で訴えがあったのは、この春に限ったことではないのだ。後小松上皇様は、連日、新内侍をお呼びになつて、ご寵愛なさっている。猿楽の役者である岩頭をお呼びになつて、新内侍と一緒に猿楽もご覧になつてゐるのだ。このように上皇様は新内侍をとてかわいがつておられるのだ。それなのに、こういう言いがかりが出てくるというのは、驚くべきことだ」と、常宗は声を潜めて話したという。

伏見宮家にお仕えする者たちをも調査するところまで読んだところ(※)、「むりやり、このようなことまでさせるほど伏見宮家を追い込むとは、恐れ多いことだ」と室町殿は仰つたという。

正

「起請文については、伏見宮家に祇候している者たちに命じたつもりだったが、さらに伏見宮本人までこのように作成していただき、恐れ多いことだ」と室町殿は仰つた。

以下の補注を削除する

※「すぐにお読みした。伏見宮家にお仕えする者たちをも調査するところまで読んだところ」…

正

「後小松上皇様からの訴えの内容は、『今春に限らず、伏見宮は何度も新内侍を召して寵愛している。猿楽役者の岩頭を召して新内侍に見せるになるなど、あれこれ寵愛している』というものだそう。全く

○七月二十二日条

誤

光明上皇の子息

正

光明上皇の皇女